

「種を蒔く人が種蒔きに出かけた」(マタイ 13 : 3)

## ■質問

私は、老健施設で介護の仕事をしています。入所者のほとんどの方が、終末を迎える方々で、「いつ死んでもいい」とか「早く迎えに来てくれれば」とか言います。また、入所者に限らず、一般の方々でも、そうです。

「種を蒔く人のたとえ話」(マタイ 13 章)にあるように、みことばの種まきをしたいと思うのですが、一般の方々や老人の方々に、どのような言葉を語ればいいのか、教えて下さい。ただ、施設の中では、表立って基督教の話はできないのですが……。

## ■回答の前に

1. 職場で宗教活動を控えるのは、メシアの律法にもかなうことです。

職場で宗教活動をしてはならないというのは、就業規則などで定められた勤務規律であり、労働者は、それを守りますと約束をして、その職場で仕事することになります。メシアの律法に照らして、私たちは、他の人と交わした契約や約束を誠実に守らねばなりません。したがって、私たちは、職場の中で、宗教活動することは控えます。では、「宗教活動」とは何でしょうか。それは、宗教の宣伝勧誘を行うことです。私たちが、他の人に基督教のパンフレットを配ったり、集会に誘ったりすることです。

2. 会話の中で自分の信条について尋ねられ、それに答えるのは宗教活動ではありません。

誰かから人生観や信条を尋ねられたときに、それに答えること、これは宣伝勧誘ではありません。尋ねてきた相手に自分の考えや思いを答えるのであって、相手を基督教に勧誘しているわけではありません。

3. しかし、自分では宗教活動ではないと思っても、周囲から宗教活動をしていると誤解されることのないよう、注意しましょう。

誤解を避けるためばかりでなく、職場では私的な会話をせず、業務に専念せねばなりません。しかし、質問にあるような職場、老健施設や病院のようなところでは、苦しみや死に向き合う人を職員の方々はケアします。そこでは、人生観や死生観に関する会話が日常的に交わされます。質問にあるように、「いつ死んでもいい」とか「早く迎えに来てくれれば」という人に対して、私たちは、どのように答えたらよいのでしょうか。

## ■回答

1. 常日頃から、私たち信者の側に備えておくことがあります。

「いつ死んでもいい」とか「早く迎えに来てくれれば」というのは、生きていても何の楽しみもないという絶望の気持ちが込められています。不信者はやみの中にいるのです。

このような言葉をかけられたとき、私たち信者は、なんと答えたら、よいのでしょうか。ことばで答える前に、私たち自身が希望に輝いていることが必要です。私たちが暗闇の中ではなく、光の中を歩んでいることが必要です。

そのためには、信者は、神との交わりを保っていなければなりません。日々、神に祈り、神との交わりの中にあることです。

そして、信者が何か罪を犯したなら、それを神の前に祈り、「天のお父様、私は〇〇をしてしまいました。これはあなたの目から見て罪でした。私は罪を犯したことを認めます」と祈りましょう。そうすれば、その罪は赦され、その人が気づいていない罪も含めてすべての不義から清められます（Iヨハネ1:9）。

信者が神との交わりを保ち、光の中を歩み続ける方法は、罪の告白の祈りです。

2. 伝道の第一歩は、証しです。私たち自身が、絶望から希望へ、暗やみから光へ、死からいのちへ、移されたことを証言します。

「いつ死んでもいい」とか「早く迎えに来てくれれば」と言われたとき、信者であれば、それに同意したり、「誰しも同じです」と受け流したりすることはできません。なぜなら、神を信じないまま死んだら、その人はもう、永遠のいのちを受けることができないからです。

このようなときに信者として答える一例を紹介します。文脈上は直接関係するところではありませんが、参考になる聖書箇所は、ピリピ1:21~23です。

「私には、生きるにしても死ぬにしても、希望があります。生きていれば、こうして皆様のお世話ができます。少しでもお役に立てれば、うれしいです。死ねば、世を去ってキリストとともにいることになります。それは、はるかに望ましいことです。」

3. 相手の方が私たち信者の証しを聞いて何か尋ねてくれたら、さらに説明することができます。時には、しばらく時間を経てから尋ねてられることがあります。

私たちの説明は、もちろんイエス・キリストについてですが、種蒔きのたとえ話での種とは、「御国のことば」（マタイ 13：19）とあります。それは、「御国の福音」（マタイ 9：35）、とか「神の国の福音」（ルカ 4：43）とも呼ばれます。

御国とは、旧約聖書で預言されていた神の国を指します。キリスト、ヘブル語ではメシアは「油注がれた者」という意味で、イスラエルの王を指します。メシアはイスラエルの王として来て、地上に正義と平和の王国を建て、イスラエルだけでなく全世界を支配します。その神の国に信者は入ることができる、私たちは死んでも復活して再びこの地上に立ち、神の国で正義と平和の世界に住むことができる、これが私たちの希望です。

ですから、私たちの説明の中心ポイントは、次の3つです。

- (1) 第一に、イエス・キリストとはどういうお方か、です。
  - ① その誕生、3年半の公生涯
  - ② 十字架にかかって死に、墓に葬られ、三日目に復活したこと
  - ③ 弟子たちに40日間にわたって現れた後、天に昇ったこと
  - ④ 定められた時に地上に再び来られることなどを語ります。
- (2) 第二に、神の国のプログラムです。
  - ① イエス・キリストが再び来られると、地上に「メシアの王国」または「千年王国」と呼ばれる神の国が立てられること
  - ② それまでに死んだ信者は全員が復活して、その神の国に入ることができること
  - ③ イエス・キリストが再び来られるまでの時代は、「奥義としての神の国」と呼ばれ、福音の種まきが全世界で行われ、信者が起こされること
- (3) 第三に、復活です。
  - ① 死者の復活が神の約束通りあることを確証するために、神は、イエス・キリストを死者の中から最初に復活させたこと
  - ② 神は、イエス・キリストの復活を信じる者を、その罪を赦して、義人として認めること